

プロイセンの建築に関する論考

お茶の水女子大学名誉教授・工学博士 田中 辰明

私は2025年9月12日、九州大学で開かれた日本建築学会大会学術講演会で「プロイセンの建築」について報告した。持ち時間が短すぎて、話の腰を折られた形で終わらざるを得なかった。あれでは伝わらない。だからこそ、報告後に寄せられた質問に答えるべく、こうして筆を執った次第である。

1. プロイセンとは何か

プロイセンという名は、もともとバルト語系の民族からきている。彼らはキリスト教以前、多神教の自然崇拜をしていた。住んでいたのは今のポーランド北部からケーニクスベルク (Königsberg、現在ロシア領カリーニングラード) 周辺にかけての地だ。

だが13世紀以降、ドイツ騎士団がその地を征服し、ドイツ人が流れ込み、民族は混血し、支配の構図が塗り替えられていった。やがてその騎士団国家が土台となり、プロイセン公国、さらにはプロイセン王国へと連なっていく。

決定的だったのは1675年。フェールベルリンの地でブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムがスウェーデン軍を打ち破った。この一戦で、ヨーロッパにプロイセンの名が轟いた。私は2024年7月に、この戦場跡を訪ね、そこに建つ戦勝記念塔を目にした。写真に収めたが、その威容はただの石の塔ではなく、力を誇示する象徴に他ならない。(写真1、2)

プロイセン王国は1701年に成立し、1918年、最後の国王ヴィルヘルム2世が第一次世界大戦で敗戦とともにオランダに逃げ、幕を閉じた。その間、9人の王がこの国を支配した。

歴代の国王たち

- ・フリードリヒ1世から始まり、軍国の基盤を築いた「兵隊王」、さらに啓蒙専制君主フリードリヒⅡ世(大王)へと続く。
- ・スペインの王位継承をめぐりプロイセンとフランス



写真1 フェールベルリンにおけるプロイセンの戦勝記念塔



写真2 戦勝記念塔にある「プロイセン軍がスウェーデン軍に勝利したことを記す碑」

は戦い、プロイセンが勝利した。最後にはヴィルヘルム1世がヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国を樹立した。(1871年)

- ・そして愚かにも第一次大戦に突っ込んだヴィルヘルム2世が国を潰した。(1918年)プロイセン王国は217年で消滅したことになる。

要するに、プロイセンとは軍事と政治の強権、その力によってヨーロッパ史を揺さぶった国家である。

プロイセンという国は、ただの王国ではなかった。ヨーロッパが「軍事国家プロイセン」と呼んだのも当然で、徹底した軍備と規律で他国を圧倒した。フリードリヒ大王

の時代には、人口に不釣り合いなほど巨大な軍を抱え、列強の中でも存在感を示した。その軍事伝統は、効率と規律を徹底的に重んじる姿勢となり、後のドイツを形づくる礎になった。

だが、プロイセンの力は軍事だけではない。行政も法も一流だった。法治国家の基盤を固め、優秀で清廉な官僚が国家を動かした。農業も産業も教育も、合理的に組織化され、インフラは整い、他国からも称賛を浴びた。

教育に関してはさらに先を行った。18世紀のうちに義務教育を導入し、「国民皆学」という理念を掲げたのだ。識字率は飛躍的に伸び、その制度はドイツ帝国、さらには現代の教育制度にまで受け継がれている。

経済もまた軍事を支え、産業を育てた。鉄鋼と石炭を中心に19世紀の経済基盤を築き、軍需産業は近代工業化を引きずり上げた。それが最終的にはドイツ全体の産業力へと発展していく。

さらに注目すべきは宗教の扱いだ。プロテスタント国家でありながら、ユグノーを受け入れ、寛容な政策をとった。彼らがもたらした技術と商業活動は、プロイセン経済を押し上げる原動力となった。

そして最後に、プロイセンの存在なくしてドイツ統一は語れない。オーストリアを外した「小ドイツ主義」の旗を掲げ、1871年のドイツ帝国成立を主導したのは他ならぬプロイセンだった。軍事力と行政能力、その両輪が近代ドイツを誕生させたのである。

結局、プロイセン王国の長所はこうだ。軍事力の強さ、法と行政の整備、教育の普及、経済発展、宗教的寛容、そしてドイツ統一への貢献——これらすべてが揃っていた。

2. プロイセンの建築

その建築は、歴代の王たちが自らの権力を石に刻んだものだ。宮殿、記念碑、軍の施設。どれも単なる装飾ではなく、権威を誇示するための舞台装置だ。私はいくつかをここに紹介するが、それは決して過去の遺物ではない。建築は権力の意思を映す鏡だという、普遍の真実を示しているからだ。

2-1 旧国民美術館(Nationalgalerie)

所在地: Bodenstraße

建設年: 1862-64, 1866-76

建築家: Friedrich August Stüler, Johann Heinrich Strack



写真3 旧国民美術館

1861年、銀行家ワーゲナーは自分が集めた同時代美術のコレクションを、プリンツレгент・ヴィルヘルムに託した。条件はただひとつ——「この収蔵品を収める独自の美術館を建てろ」。その一言で、長らく夢物語にすぎなかった国立美術館が現実になった。

1862年、その設計を託されたのが建築家シュテューラーだ。彼はフリードリヒ・ヴィルヘルム4世がかつて温めていた構想を土台にした。それは古代神殿の姿を借りた建物だった。高い基壇の上に大階段を備え、すでに1796年、ギリがフリードリヒ大王の記念碑に描いたイメージを継承するものだ。だが、シュテューラーは1865年に死去し、その志をシュトラックが引き継ぐことになった。

完成した建物は堂々たるものだった。高さ10メートルの基壇の上にそびえ立ち、偽ディプテロス様式——つまりコリント式の円柱がぐるりと囲む姿である。側面は壁に食い込む付け柱、正面は開け放たれた柱廊玄関。その上に浮彫の破風、さらに棟頂の彫像群。背後はアプス形の円形構造で閉じられている。

正面の大階段は実用よりも演出のためにある。入口は下に設けられているからだ。この階段は同時に、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世の騎馬像を掲げる台座ともなった。エンタブラチュアに刻まれた銘文は「ドイツ芸術に寄せて」。その言葉がすべてを物語る。階段下の2体の塑像と破風の3体の像は芸術そのものを象徴し、破風中央には芸術の守護者ゲルマニアが毅然と座している。(写真3)

2-2 ドイツとフランスの教会

(Deutsch und Französische Kirche)

所在地: Gendarmenmarkt,



写真4 ドイツとフランスの教会



写真5 ブランデンブルグ門

建設年：1701-05, 1780-85, 1992-96

建築家：Martin Grönberg, Giovanni Simonetti, Louis Abraham Quesnays, Karl von Gontard, Jörg Pleuser

第二次大戦で建物はすべて破壊されたが、1975年から復元工事が始まった。塔は基礎から再建され、方形の基部に神殿風の構築物が三つ付けられ、その上に円形の塔身が立ち上がる。塔身はコリント式の柱に囲まれ、さらに十二角形のアティカ、そして鋭くそびえる円蓋屋根が重なっていく。

塔には聖書の人物や徳を象徴する彫像が飾られ、破風の上にはフランス教会側に「勝利する宗教」、ドイツ教会側には「勝利する徳」が据えられている。フランス教会内部にはユグノー博物館が置かれ、塔の内部にはカフェもある。さらに教会はヨルク・プロイザーによる改修を経て、「ドイツ史への問い」展の会場としても使われている。(写真4)

2-3 ブランデンブルグ門 (Brandenburger Tor)

所在地：Pariser Platz

建設年：1788-91

建築家：Carl Gotthard Langhans

ブランデンブルク門は、ベルリンの顔そのものだ。今に残る唯一の本物の城門でもある。西側から「ウンター・デン・リンデン」という並木道の始まりを切り開き、かつてはパリ広場を囲む建物群の一角をなしていた。18世紀後半の大建築の掉尾を飾る作品であり、しかも十九世紀から20世紀にかけて、ギリシア趣味の古典主義を新たに解釈しながら都市の景観を支え続けた、ベルリン最初の本格的な古典主義建築でもあった。

この門が生まれたのは、1769年、ヴェルトナー大臣が仕掛けた首都美化計画の一環だった。設計を担った建

築家ランガンスが目指したのは、アテネのアクロポリスにそびえるプロピュライア。そこにならい、中央の門を両側の二棟が挟み込む形となり、当初それらは衛兵所と税関に使われた。

門は奥行き11メートル。厚い壁に仕切られた五つの通路を持ち、その両側には高さ14メートルのドーリス式円柱が六本ずつ並ぶ。比例は古典より細長く造られ、アーキトレーヴを支え、その上にメトープ＝トリグリフのフリーズを載せる。さらにアッティカが段状に迫り出し、その頂点には勝利の女神を従えた四頭立ての戦車、クアドリガが据えられている。

材は砂岩。仕上げは石灰の溶液で白く塗られ、装飾にはヘラクレス伝説などギリシア神話の場面が刻まれた。メトープの浮彫りにはラビテス族とケンタウロス族の戦いが描かれている。

そして何よりも目を引くのは頂飾りだ。四頭の馬と戦車、勝利の女神の像。銅細工師ジュリーが、彫刻家シャドーの構想をもとに木型の上で仕上げた。クアドリガの基壇には「平和の行列」のレリーフ。これもシャドーの手になるものだ。全体はフリードリヒ2世の戦争と、その後訪れた平和をたたえる象徴としてまとめ上げられている。

今、パリ広場は歴史的規模で再整備が進んでいる。ブランデンブルク門は、ベルリンの過去と未来をつなぐ揺るぎない証人としてそこに立ち続けているのだ。(写真5)

2-4 高架鉄道、地下鉄道アレクサンダー広場駅 (S- und U-Bahnhof Alexanderplatz)

所在地：Dickensstraße - Alexanderplatz

建設年：1878-82, 1963・64; 1911-13, 1927-30, 1996-97



写真6 ドイツ鉄道ベルリンアレキサンダー広場駅舎

建築家：Johann Eduard Jacobsthal; Hans Joachim May, Günter Andrich; Alfred Grenander; Rebecca Chestnut & Robert P. Nies

アレクサンダー広場という名は、1805年にロシア皇帝アレクサンドル一世が訪れたときに与えられたものだ。十九世紀のはじめまでは、城門の外にあって、家畜や羊毛を扱う市場にすぎなかった。

今のラートハウス通りから広場に入るところには、かつて「王のコロナーデ」と呼ばれる建物があり、1910年まで立っていた。

だが状況は一変する。市電鉄道とアレクサンダー広場駅が1878年から82年にかけて造られ、さらに地下鉄A線(現U2)が1911~13年に開通、D線(現U8)とE線が1927~30年に加わった。これで広場はベルリン随一の交通の結節点に変貌した。市電鉄道は高架でつくられ、東西を12キロ直線に結び、両端ではすでにあった環状線につながっていた。

駅的设计はヤコブスタールの手になる。丸天井のホールはリベット留めの三鈎アーチで覆われている。1963年から64年にかけて、マイとアンドリッヒの手で大改修が行われ、基壇には店が組み込まれ、プラットホームへの動線が改善され、壁はトラバーチンで覆われ、ホールの屋根も近代化された。Sパーンの駅からは階段を通じて複雑な地下鉄網へ入り込める。

最初の地下鉄は1911~13年、アルフレート・グレナnderの設計によって建設された。彼はフェーゼと共に、20年代末に行われた大拡張も担った。地下12メートルに及ぶ「アレックス」の地下空間にすべてのホームが通路でつながれた。駅は1996~97年にチェスナット&ニースによって修復され、その際、基壇階のアーチがふたたび露わになった。(写真6)



写真7 武器庫

2-5 武器庫(Zeughaus)

所在地：Unter den Linden 2

建設年：1695-1706

建築家：Johann Arnold Nering, Martin Grünberg, Andreas Schlüter, Jean de Bod, Otto Häsler

二階建ての建物は、四つの翼を広げて中庭を囲む。元の設計は、パリ建築アカデミーの長ブロンデルの手になるものだ。彼は大使としてブランデンブルクに滞在して以来、この宮廷に縁を持った。

大選帝侯は遺言で、武器庫の建設を命じた。最初の責任者ネーリングは、礎石を据えた直後に死んだ。後を継いだグリュンベルクが、1698年までに建物の骨組みを仕上げる。そこに現れたのがシュリュターだ。彼は彫刻家として参加し、やがて全体の監督となった。彼が手がけた中庭の「死にゆく戦士のマスク」22体は、バロック彫刻の最高傑作と称えられる。

だが建物の一部が崩れ、監督はド・ボットに交代した。彼は元はパリでブロンデルの弟子だったユグノーだ。1701年、彼は中央の突出部リサリートを設計した。ルーヴル宮殿のファサードを下敷きにしたのである。重い屋上装飾をやめ、代わりにバルコニーを置いた。四本のトスカナ式柱と三角ペディメントが正面を突き出し、基壇は岩を模した力強い造形だ。

1階は丸窓を刻んだ石積み、2階はピラスターで区切られる。入口の砂岩像やバルコニーの飾りは、彫刻家ヒュイックの手になる。

建物はもともと武器庫として造られた。1730年、ド・ボットが中庭の四隅に新たな建物を加え、1877年にはヒッツィヒが博物館へと改装した。戦争で破壊された後、ハesslerが復元し、ドイツの歴史を語る展示やガラスケースが並ぶ姿へと生まれ変わった。(写真7)

2-6 旧帝国議会(Ehem. Reichstag)

所在地: Platz der Republik

建設年: 1884-94, 1995-99

建築家: Paul Wallot, Normann Foster

ヴァロットは1882年、帝国議会議事堂の設計競技に勝った。だが、勝利は栄光ばかりではなかった。建設に入ってから、何度も計画を練り直し、修正せざるを得なかったのだ。結局、採用された案は当時から議論呼んだ。二つの採光中庭に、牢獄じみた角塔を四隅に配した、記念碑的な長方形の建物だった。

基壇は荒々しいラスティカ仕上げ、その上に二層の主要階がそびえ、「ピアノ・ノビーレ」が誇示されていた。正面は王宮広場、いまの共和国広場に向けられ、中央の正門には六本の円柱、その上に力強いアティカと三角破風がのしかかっていた。角塔と門のあいだには、五つの開口をまたぐ巨大柱列。威圧感の塊だった。

そして建物を支配したのは、鉄とガラスでできた高さ75メートルの巨大ドーム。「人民のドーム」と呼ばれ、皇帝の冠を戴くランタンで飾られたそれは、当時「傑作」と讃えられた。外観はベガスらの過剰な装飾彫刻で覆われ、議会政治の理念を象徴するという触れ込みだった。

内部は豪奢。だが1933年、ナチスが仕組んだ放火で一部が焼け、第二次大戦ではさらに壊滅的な打撃を受けた。ドームは爆破され、廃墟と化した。戦後1957年から61年にかけて修復工事が行われたが、角塔は縮小され、彫刻も削ぎ落とされ、ドームも戻らなかった。結果、あのバロック的な迫力は失われ、建物は骨抜きになった。

内部は1961年から72年にかけて、バウムガルテンの手で改装された。帝政期の華美を削り取り、1960年代らしい質素で機能的な空間へとすげ替えられたのだ。

ベルリンが再び首都と決まると、議事堂は連邦議会の本拠に選ばれた。国際設計競技が開かれ、最終的にノーマン・フォスターが指揮をとることになった。当初の彼の案はヴァロットの建物の上に記念碑的な屋根をかけるというものだったが、大幅に変更された。

新しい象徴として再びドームを建てる——そう決まっていたフォスターは違った。彼が描いたのは、卵形のガラスのドーム。中にはランプ状のスロープが巡り、誰でも歩いて登れる。鏡のシステムが自然光を集め、1階のガラス張りの本会議場へ導く仕掛けだ。

バウムガルテンの手がけた増改築はほとんど撤去され、古い建物の正面は中央ホール部分を中心に、新しい建築の顔としてよみがえった。プロジェクト全体は、エ



写真8 ドイツ旧帝国議会

ネルギー効率を徹底的に追求した設計思想で貫かれていた。(写真8)

2-7 サンスーシー宮殿(Schloss Sans souci)

ブランデンブルク州ポツダムに位置するサンスーシー宮殿は、1745年から1747年にかけて建設された。設計者はゲオルク・ヴェンツェスラウス・フォン・クノーベルスドルフ。建築様式は優雅なロココだ。

名称の意味

「Sans souci」とはフランス語で「憂いなし、気楽に」という意味である。フリードリヒⅡ世(大王)は、ベルリンの宮殿で執務中に美人のスパイを送り込まれるなどし、人間不信に陥った。そしてポツダムのサンスーシーで執務することにした。この宮殿において、煩雑な宮廷儀礼から解放され、音楽や哲学、芸術に浸る生活を望んだのである。

建物の特徴

一階建ての小規模な宮殿だが、その優雅さは長大なベルサイユ宮殿にも負けない。南面には葡萄の段々畑が広がり、テラスからは庭園全体を一望できる。内部は豪華なロココ装飾に彩られ、特に大理石のホール(貝の間(Muschelsaal))や、哲学者ヴォルテールが滞在した「ヴォルテールの間」は名高い。

庭園と周辺施設

宮殿はサンスーシー公園の中心にあり、公園全体は約300ヘクタールの広大な土地だ。バロック式整形式庭園とイギリス風景式庭園が巧みに融合している。公園内には新宮殿(Neues Palais)、オランジェリー宮殿、中国茶館(Chinesisches Haus)などが点在し、18世紀プロイセンの文化の豊かさを雄弁に語る。



写真9 サンスーシー宮殿、ポツダム

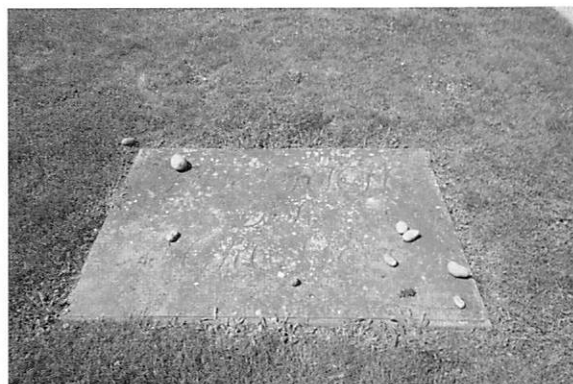


写真10 フリードリヒ2世(大王)の墓、ポツダム

歴史的意義

フリードリヒ大王はここで音楽会を開き、哲学的対話に耽った。ヴォルテールも招かれ、自由な思想と芸術の交歓が繰り広げられたのである。1990年、宮殿と庭園はユネスコ世界遺産「ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群」の一部に登録された。また、大王の遺言に従い、1950年代には彼の墓が葡萄畑の上のテラスに移されている。大王の墓にしてはあまりにも小さく地味である。これも大王が質素を旨としたことによる。人嫌いであった大王はここで9匹の愛犬と共に眠っている。大王は南米からジャガイモの原種を輸入し、改善した。現在ジャガイモはドイツ人の主食である。墓標の上にはジャガイモが供えられている。(写真9、10)

2-8 赤の市庁舎(Rotes Rathaus)

所在地: Rathausstraße 15-18

建設年: 1861-69

建築家: Heremnn Friedrich Waesemann

「赤の市庁舎」が建つ前、ベルリンのこの場所にはご



写真11 ベルリン赤の市庁舎

ちやごちやと不規則に並ぶ古い建物があつた。そこには中世の裁判所ラウベヤ、ネーリングが手掛けたバロック様式の市庁舎まで含まれていた。だが1859年、ヴェーゼマンが新庁舎の設計を任されると話は一変する。彼は自らの構想に加え、競技設計のアイデアまで取り込んだ。その結果、一帯の建物はすべて取り壊され、跡形もなく消えた。

新庁舎は二段階で築かれた四階建ての巨塊だ。四つの翼棟が敷地を囲み、幅90メートル、奥行き100メートルの空間を作り上げた。正面には高さ97メートルの塔が突き立ち、内部は渡り廊下で結ばれる。北イタリアの市庁舎宮殿を思わせる厳しい構えで、精巧なテラコッタ装飾が巨大なレンガ造の躯体を引き締めている。とりわけ目を奪うのは、バルコニー欄干部の浮彫りや、アティカを戴いた堂々たるコーニスだ。角は堡塁のように固められ、大玄関を挟む細塔は主塔へと視線を導く。塔の隅にも小塔が飾られ、二層部分はアーチ窓が全体をまとめる。外壁を巡る36枚のテラコッタ板は「石の年代記」と呼ばれ、1871年までのベルリンの歴史を刻んでいる。これが市庁舎の象徴だ。

戦争で破壊された後、1953/54年にマインハルトの指揮で再建された。外観は旧姿のまま蘇り、内部は一部新しい形をとった。交差ヴォールト天井をもつホールはオリジナルが生き延びた。玄関前にはクレマー作の二つのブロンズ像が置かれ、瓦礫撤去の労苦を記念している。(写真11)

2-9 フィングストベルク(Pfingstberg)

ポツダムの北に、プフィングストベルク——聖霊降臨祭の丘と呼ばれる小高い丘がある。標高わずか76メートルだが、そこからは市街、ハーフェル川、そして遠く



写真12 フィングストベルク、ポツダム



写真13 旧博物館

ベルリンまでも一望できる。眺めは圧倒的で、まさにポツダムを見渡す舞台といえる。

この名は、かつて聖霊降臨祭の折に人々が集い祝ったことに由来する。丘は古くから市民の憩いの地であった。丘の頂にはベルヴェデーレが立つ。これは皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルム4世が夢見た展望宮殿で、ペルジェスやアルニムといった建築家が設計にあたった。イタリア・ルネサンス風の優雅な姿、二つの塔と回廊を備えた壮麗な構えは、今なお訪れる者を圧倒する。しかし建設は資金難と戦争に阻まれ、未完のまま残された。

周囲の丘陵はレンネの手で整えられ、風景式庭園として仕上げられた。いまでは世界遺産「ポツダムとベルリンの宮殿群と庭園群」の一角を占める。

フリードリヒ大王の時代から人々はここを散策に訪れた。19世紀半ば、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世はこの丘を「ポツダムを北から壮麗に見せる舞台」に仕立てようとした。だが20世紀、ドイツ分断の時代には荒廃し、ソ連軍やシュタージの施設として閉ざされてしまう。

再統一後、修復が進み、90年代から再び市民に開かれた。いまベルヴェデーレはポツダム随一の展望台として人気を集め、夏には音楽や文化の催しも行われる。歴史の荒波をくぐり抜けてなお、この丘はポツダムの誇りとして生き続けている。(写真12)



写真14 カール・フリードリッヒ・フォン・シンケルの銅像(氏の生地ノイルピン)

され、19世紀の博物館建築の模範となった。高い基壇の上に建つこの二階建ての四翼構成の建物は、両側に二つの中庭を抱き込み、中央にはロトンダを配置している。その立方体的外殻は、クリスティアン・フリードリヒ・ティーク作の馬を制する像によって頂飾され、他の建物部分の上にそびえ立つ。ルストガルテンに面した長さ78メートルの正面は建築的構想の主要なモチーフであり、全幅にわたって18本のイオニア式柱による列柱廊として開かれている。そこへと上る大階段の位置では、奥行き方向に五間分広がり、ここで二層構成が明確に感じられる。入口の両脇には上階へと導く階段があり、その背後にロトンダがある。そこはパンテオンの理念を受け継ぐ古典的明晰さをもつ空間である。コリント式円柱の環がギャラリーを支え、下部は滑らかで上部は壁龕で区切られた円筒壁の上に、採光のための天窓をもつ格間装飾の円蓋がそびえている。大階段前の青銅騎馬像群は、1842年にアウグスト・キス(アマゾン像)、1854年にアルベルト・ヴォルフ(獅子と戦う闘士像)が設計した。屋根の上には7羽のプロイセン鷲が置かれている。戦争で

2-10 旧博物館(Altes Museum)

この博物館の建設は、ナポレオンによって持ち去られた美術品の返還と関連していた。設計はシンケルが1822・23年に行い、建設は1825～1830年にかけて、埋め立てられた堀の沼地に難しい杭基礎を施して実施された。この建物は旧ルストガルテンを北側で閉じる役割を果たした。正当な新古典主義の主要作品の一つとみな

焼失した建物は1958～66年にかけて復元された。階段前の花崗岩製の大鉢は、1828・29年にクリスティアン・ゴットリーブ・カンティアンがフルステンヴァルデ南方のマルクグラーフエンシュタインの一つの岩塊から制作したものである。(写真13)

ベルリンに数々の建築を残したのは、カール・フリードリッヒ・シンケル(1781～1841)だ。だがその作品の多くは、結局ギリシャ建築の焼き直しにすぎず、新古典主義と呼ばれる流派の代表として名を馳せただけに終わった。シンケルはブランデンブルク州のノイルピンの生まれだ。筆者が昔そこを訪れたとき、生家は博物館になっていた。だが2024年7月に再び足を運ぶと、博物館はすでに焼け落ち、銅像だけが無言で立っていた。(写真14)

2-11 劇場(Schauspielhaus)

所在地: Gendarmenmarkt

建設年: 1818-21, 1979-84

建築家: Karl Friedrich Schinkel, k. Just, Manfred Prasser

印象強く見せるため、幅のある大階段の上にイオニア式の列柱ポルティコを突き出し、それが馬車の乗り入れを覆う仕掛けにもなった。注目すべきは、外壁がもはや単なる壁面や窓でできているのではなく、一次・二次の建築要素が組み合わさった構造体であり、そこに窓がはめ込まれる仕組みだったことだ。

外装の彫刻装飾も見逃せない。ギリシャの伝統を踏まえ、中央にはペガサスとアポロン、さらにはグリフィンに引かせた四頭立て戦車が置かれた(ラウフ作)。上部破風には舞台芸術の寓意像、ポルティコの破風にはニオベの群像、北にはバッカス祭、南にはオルフェウスとエウリュディケ。九人のムーサたちも並んでいる。これらはテークの設計によるものだ。

内部もまた考え抜かれていた。舞台と1200席の客席は中央棟に収められ、コンサートホールは南に、役者の控室やリハーサル室は北に置かれた。客席は半円形の平面で、床は傾斜し、二層のバルコニーとボックス席が後方に並び、王侯の特別席とプロセニウム・ボックスが備わった。天井は天幕風に飾られ、華やかな空間を形づくっていた。コンサートホールも長方形の空間にバルコニーと列柱のギャラリーを配し、格調を漂わせていた。(写真15)



写真 15 劇場

おわりに

建築家ブルーノ・タウト(1880-1938)文献^{8,9)}は、プロイセンの建物を見て悟った。新古典主義に縛られているかぎり、ドイツの建築に明日はないと。彼は目をアジアに向け、そこにこそ光を見いだした。そして1933年、日本へやって来る。2年4か月のあいだ滞在し、桂離宮や伊勢神宮の美を絶賛し、それを世界に広めたのだ。

プロイセンは欧州では後発の国家であった。しかし良く機能した官僚制、強力な軍隊、義務教育制度などを備えていた。我が国も大変多くをプロイセンから学んだ。我が国の皇室典範が天皇継承を男系に定めているのもプロイセンの王室典範に学んだことによる。

〈謝辞〉

現地調査で同行して頂き貴重なご意見を頂いたアクセル・ヤーン博士(Dr. Axel Jahn) 並びにゲルド・ゾビツカート(Gerd Sowitzkat) ご夫妻に深甚なる謝意を表す

〈参考文献〉

1. Knaurs Zeittafeln zur Deutschen Geschichte
2. 田中辰明 プロイセンの建築に関する考察 日本建築学会大会(2025年9月、九州大学) 学術講演会梗概集
3. Architekturführer Berlin, Dietrich Reimer Verlag Berlin, 1997
4. 田中辰明 ベルリン市パンカウ地区の建築 月刊建築仕上技術 2016年6月号
5. 田中辰明 ドイツ帝国時代のベルリンの建築物 月刊建築仕上技術 2023年5月号
6. 田中辰明 絵葉書に見るヴァイマル共和国時代のベルリン 日本建築学会大会学術講演会梗概集 2023年9月
7. 田中辰明 絵葉書に見るヴァイマル共和国時代のポツダム 日本建築学会大会学術講演会梗概集 2024年9月
8. 田中辰明「ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家」中公新書2169, 電子書籍もあり
9. 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会